現地ルポルタージュ

地域社会のしあわせづくりをめざして

―創意・工夫が生きる信用事業―

山口宇部農協

農協信用事業は、言うまでもなく、総合事業の一環として展開されている。同時に一般の金融事業としての性格も合わせ持つ。それだけに今日の金融環境の激変と農協自体の大型合併の進展は、明確な理念の裏打ちに基づいた事業運営をより強いていると言っていい。そこでは、単純な一般金融機関の模倣では、発展は望めない事をも意味している。人的組織体であり、なによりも地域社会とともにある協同組合であるという、自己の存立基盤を繰り返し確認すること、そこからしか時代への対応策もまた見えてこない。

その意味で、ここに紹介する山口宇部農協は、実に地に着いた活動を進め、実績を上げている。困難な局面を打開するのに妙薬などそうそうあるものではない。自己の基盤を知り、自己の機能と事業活動の実力と課題を知り、一歩ずつ目標に向けて努力するという、当然と言えば当然の活動が、現実に行なわれているかどうか、それが将来を決定してしまう。掛け声だけなら、あるいはプランだけなら誰にでも出来る。

経営理念は「和」「緑」「愛」「夢」

山口宇部農協は平成七年四月、二市三町の六つの農協が合併して誕生した。宇部市を中心とした市街地から、お茶、和牛肥育が営まれる中山間地までを幅広く含む。組合員は、二万名弱で正・准が拮抗している。准組合員は借入に際して加入したものが多い。

当組合の経営方針は明確だ。そこには「地域社会のしあわせづくりに貢献する」とあり、「和」「緑」「愛」「夢」と四つの想いが掲げられている。和は協同の和であり、緑は農業を守り消費者との連携による豊かな地域環境を創ることであり、愛は利用者の立場に立った事業展開であり、夢は「やりがいのある農業」「潤いのある生活」「働きがいのある職場」「将来性のある経営」を内容とする。

生きる企画生かされる企画

では、こうした方針のもと信用事業はどう展開されているのか、当組合の独自の企画による「商品」（商品と書くことに抵抗がないわけではないがわかりやすくするために使う）のいくつかを呈示することで明らかにしたい。

先に准組合員の多くが借入利用者から、と記したが、若い人たちへの対応こそ重要と、県下で最も安い金利を適用して、まず身近な「マイカーローン」を進めた。農協との利用関係ができれば、リピーターとしてやがて住宅ローンの利用も期待できるし、他事業の利用も視野に入れられるからだ。

また、本多金融共済部長は、あるときゲートボール協会会長から「一般の人が行っても金預けられるのか」と言われてショックを受けたという。農協は地域の金融機関として地域住民に浸透していると思っていたが、そんな程度だったのだ。まず、地域の人々に、農協は誰でも利用できるのだ、ということを知らせることから始めなければならない。そこで、効果を疑問視する意見もあったが、思い切って新聞広告を多用して進めているのが「ＪＡまごころキャンペーン」である。貯金額に応じ、魚介類、畜産物等のプレゼント五コースが設定してある。県下共通企画のキャンペーン時の記念品も、抽選を避け、当農協は一定額以上の利用者には全員に配布するなど、きめ細かい。抽選では「どうせ当たらないからいい」という人もいて不公平感を招くのに比べ、点数によって商品がもらえるプレゼントコースは好評だという。

山口県では今年国際見本市「山口きらら博」が開催される。それにちなみ「きらら定積」を新設した。定期積金の商品には各地にも多様なものがあろう。当農協のユニークなのは、契約者にもれなく、ステンレスボトルやリュックなどの「自然散策グ

ッズ」をプレゼントすることにある。博覧会の広大な跡地が自然公園になることを見越し、自然と共生する農協の理念をも訴えた企画である。もともと当農協は定積の契約額比率が県下平均を下回っていたが、春に予定される四回目のキャンペーンで、県下平均を上回る目標を達成する。

中小商店や地場の業者への資金供給の利便性を高めるため、県信用保証協会の保証付融資を率先して実施していることも記しておいていいだろう。

働きがいのある職場とシステム

農協の活動を実際に支えるのは職員である。職員が経営理念を自分のものとして理解し、意欲的に取り組まなければ、「絵」だけに終わってしまう。山口宇部農協の信用事業活動の実践を可能にしているものに、独特の人事・業務システムがある。一つは「トータル人事システム」で、人事考課に計数化された絶対評価を取り入れて客観化した。同時に役職定年を導入し、管理職の若返りが図られている。厳しいがやりがいある制度として職員の意識づけに寄与しているという。もう一つは「業務チェックコントロール」とよばれる業務の体系チャート。それぞれの担当者、管理職の役割や一日の業務の内容を改めて一覧表にしたものだ。こうすることでやるべき仕事が徹底できる利点がある。「当り前のことを当り前のようにやらないから伸びないのだ」と松永常務から苦言を頂戴していると、本多部長は苦笑する。その他の業務マニュアルもチャート化され実に的確で見やすい。

仲間づくり定期積金

最後にもう一つだけ紹介したいのが、女性部の「仲間づくり定期積金」である。

当農協では、女性部を中心とする福祉活動、助け合い活動が盛んである。農協の「ふれあい課」の梶山課長を先頭に、訪問介護、配食サービス、園芸教室、「元気のでる農業―たまねぎを植えよう活動」、「ふれあいの旗」声かけ運動、「星の数ほどグループづくり」など多彩な活動がくりひろげられている。

そんな活動のなかで生まれて来たがのこの定期積金である。要介護を自分達の問題として捉え、合わせて仲間との楽しい旅行を実現しようというもので、女性部員および地域の人々に広く参加を呼びかけている。五千円、一万円、一万五千円、二万円の四コース、期間は一年。満期時には内一〇万円を定期貯金に振替え将来の介護に備え、残りおよび利息を旅行の費用にあてる。平成十一年からスタートしたが、現在七百名ほどが積み立てている。

農協活動の基盤には生活活動がある。協同活動が農協の原点なら、協同活動の原点は生活活動にある。でなければ協同組合とは言えない。そしてその活動の実体を担うのが女性部である。介護、福祉と信用事業を一体として捉えたこの定積は、まさに総合農協らしい事業と言えるだろう。

金融環境が激変し「ＪＡバンク」のあり方が模索されている。当農協が実施していることは取りたてて目新しくはないかもしれない。しかし、従来の実践の上に少し工夫を加え、その周辺に商品の幅を広げ、「地域社会のしあわせづくりに貢献する」という理念を具体化している姿は、協同組合としての農協信用事業の確かな方向性を明示している。

（平井隆）